

# 彼方「かなた」

校長通信  
H25.1.22  
Vol.39

【いざは普段なり】



三年生と面接練習をしています。真剣にやればやるほど普段とのギャップが大きくなり、ギクシャクした受け答えが、沢山繰り広げられています。「本番でなくよかったですね！」と何度声をかけたくなったことか。

緊張し過ぎて、右手と右足が同時に前に出て、変な歩き方になってしまう生徒、自分の出身校を言えずに何度も噛みまわってしまう生徒、志願理由を覚えきれずに途中で黙り込んでしまう生徒、自信がなくて声小さくなって何を話しているか聞き取れない生徒、隣の人に動きを合わせようとして動き出さないでいる生徒、質問されていることが理解できないまま全然違う受け答えをする生徒、普段足を閉じて座り慣れていないのでふるふる足が震えてくる生徒、「ハイ！」と答えてから言わなきゃと思いつきながら答える途中で「ハイ」と言い直し、最初からもう一度話し出す生徒、普段使ったこともない丁寧な言い回しをするので、妙に違和感のある話し方をする生徒、「ら」抜き言葉をやたら連発する生徒、「やっばし」「えーっと」「って言うか」「くっす」普段使っている言葉を連発する生徒、何を聞かれても答えず、

無言で時が過ぎるのを待つ生徒、ホックが外れていたり、ジャージがズボンやスカートの裾からのぞいている生徒、片手でドアを思い切りガラッと開ける生徒、背中が丸まった姿勢で座る生徒、本当にいろいろです。

面接をしていたく先生に不快感を与えず、自分のよさを真剣に売り込んでくのが面接です。真剣さ故の失敗は、失敗ではありません。ただ、緊張しすぎて、何を答えているかわからないような声の大きさは残念ながら相手に自分を売り込むことにはできません。

卒業した先輩も沢山の失敗をしてくれました。普段の服装（制服の下にジャージ）でいったら「その服装で面接ですか？」と高校の先生に言われたり、「そのホックは閉まらないのですか？」と聞かれたり、「髪の毛は結ばない学校ですか？」と訪ねられるという調子です。いずれも返答できず無言で対応し、判定がCになってしまった例です。他にも入学の意志が言えずにダメになった生徒もいました。いずれにしても誠意ある態度で臨み、それが形となって表れなければ相手には伝わらないと言うことです。しかもそれは、普段からやっていないと必ず本番でボロが出るのです。うまくいかないと必ず「先生！大丈夫、本番はちゃんとやるから！」と言い訳をします。でも入試は騙し合いではなく、受ける側の真摯さや意欲、熱意と言った内なる心を表現する舞台だと思います。舞台だからこそ一礼し、心を尽くして丁寧に答え、相手に聞き取れるように明るく受け答えしなければなりません。落ちるために受験する人は誰もいはいはずですが…。

三年生の学年通信に載っている言葉、「いざは普段なり」です。入試の日は、朝から帰るまで見られています。高校側は、受からせるためではなく、落とすためにダメな方を見つけることにウエイトを置く場合もあります。わずかな面接時間だけでも素が出ます。それが一日中であればもつと普段の姿が出ます。だからこそ、身を美しくするための躰が必要なのです。何も躰けていないと見苦しくなってしまう。テストの点数をいくらとつても面接官の評価がCでは合格できないのです。

入試が終わった後、教室の椅子をすべて机の中に入れて、教室のカーテンをまとめて帰った受験生がいました。その生徒は、普段学級でやっている日直の仕事そのままやってきたのです。片付けをする会場の先生方の負担が少しでもすくなくなければという気持ちだったそうです。そこには受かるためとかよく見せるという感覚は微塵もなかったのです。普段から素直にそういう気持ちで生活しているからこそ所作だったのです。

面接練習は、いくらでもできますが、心の入った面接は、普段の生活の中で躰けてこななければできません。毎日の挨拶や返事、相手を思う心、良さを見るアテンテナ、これが自分を売り込むために必要な最低限の道具です。みんなを意識して生活したいものです。

